研究とは何をすることか ―人文学部開設にあたって―

東海学園大学人文学部長　杉　山　幸　丸

1　大学教員になぜ研究が必要か

大学の教員には研究と教育が、その職務として課せられている。教育だけしっかりやっていれば良いように考えられるかもしれないが、なぜ大学の教員には研究が必要なのだろうか。一言で言えば、大学の教育は既存の知識を学生に分かりやすく伝達するだけでなく、知識と情報の基になっているものの考え方、人生観や世界観まで含めて人の生き方など、学生に多くの示唆を与えることが求められているからであろう。自分の学生時代を振り返ってみても、教わったはずの○○学の具体的な内容は半ば忘れてしまったが、あの先生の熱のこもった講義の雰囲気は忘れられないとか、学問への姿勢に感動した、目標にまい進するあの生き方に感銘を受けた、という例がいくつかある。また、(たとえ素地がもともとあったにしても)自分の人生の決定的な方向付けがなされたのは、少数の先生の授業とその先生とのわずかな対話だったという思いがある。誰にもそんな思い出が一つや二つあるのではなかろうか。教師とは、研究と教育を通じて生き方そのものを伝達する、つまり若者たちに夢を持たせる職業なのだ。

20歳前後の大学生時代とは、そんな感受性に富んだ、これからの生き方を探っている、何ものかを求めている人生の一時期なのだと思う。中学や高校時代とは大きく異なる、人生のターニング・ポイントなのだ。近頃の若者は幼稚になったとか、学力が低下したとか、すぐキレてしまうとか、生きる意欲が感じられないなどと言われるが、基本的な人間の成長速度に大きな変化はないはずだ。近頃は大学執行部も教員たちも学生を軽く見て、まるで子どもか物品を扱うように管理することにばかり気を取られがちだが、大学が自分たちをどんな風に見て、どんな風に扱っているか、ぐうたらに見える学生たちが怖いほどクールに、しっかり見ている。このことを決して忘れてはならないだろう。

不思議なことに、誰もが毛嫌いしたり軽んじた先生はいたが、誰にも感銘を与えた先生は多くなかった。友人に感銘を与えた先生と私に感銘を与えた先生は、必ずしも同じではなかった。つまり、教師側の発信の周波数と学生の受信の周波数はそれぞれ多様らしいということだ。そのときの状況によるかもしれない。いずれにしろ、自分の周波数まで変えることは無理だとしても、また、いくつもの周波数で発信することは不器用な教師には無理だろうが、教師の側が精一杯発信の努力をすれば、全部は無理だとしても、少数でも受信してくれる学生がいると期待してよいだろう。不器用でも心配することは少しもない。

さて、そんな学生たちに何をどう教えるのが大学教育か。それは、○○学の具体的内容と同時に、なぜ○○学が面白いのか、先生は何が楽しくて夜まで研究室にこもって休日まで費やし、

一生をかけてまでそんな役に立ちそうもないことに情熱を燃やしているのか。それを学生たちに伝えることが大事なのではなかろうか。ただ単に飯の種としてやっている学問なら、早々に止めたらよろしい。無気力だといわれる学生たちの隠されたアンテナに届くような発信を心がけなければならない。それが大学教員の使命であり、本当は、大学教育の隠された最も重要な部分なのだと私は思う。

大学の教員は、上手に教えればよいと言うものでは決してない。上手に教えることはもちろん大事だが、自分の取り組んでいる学問に対する熱を伝えることこそ、大学教育の本命なのである。

2　自然科学における研究とは

研究とは何をすることか。自然科学の世界では極めて簡潔に定義されている。すなわち、森羅万象、いずれかの事象・現象に関して新知見を得られるような作業をすることである。英語で "something new", ドイツ語で "etwas neues" と言うそうだ。研究とはもっと奥深く幅広いもののはずで、この定義は研究を矮小化したものだ、という意見があることは重々承知の上である。私もその通りだと思うのだが、専門化の進んだ今日、個々の研究がこの定義の線で進んでいることは確かだ。もちろん、個々の研究者はもっと大きな目標に自分の研究がどうつながるかを考えておかなければならないが、とりあえずはこの定義で話を進めさせてもらおう。

努力の結果、自然界に存在する、あるいは発生するなんらかの現象を世界で初めて発見すれば、それは研究の成果となる。もちろん、次の段階として、その現象の起こるメカニズムを明らかにし、その他の現象との関係を明らかにする必要がある。類似の現象が別の条件で起これば、メカニズムの推測はより確からしいものになる。こうして、多くの研究者が類似の現象に寄ってたかって、現象の発見とそのメカニズムの解明に取り組んできた。そして今でも精魂込めて取り組んでいる。たくさんの事例が発表され、その生起のメカニズムも分かってきたところでもうひとつ同じような現象を見つけても、もはや第一級の研究の成果とはいえなくなる。これまでの考え方を変える必要がある発見か否か、そこらへんが発見の価値が研究成果と言えるか否かの境目になると言えよう。なんらかの意味で新しいこと、"news" であることが必須の条件なのである。

もちろん、個々の発見が新しいとは限らなくとも、大量に集まってはじめて全体像が分かってくることもある。それらの個々も研究の一部をなすものである。縄文時代の遺跡の発掘。もうすでに無数の遺跡が発掘されている。しかしたくさんの遺跡の分布が明らかにされて、初めて分かってくる全体像があるかもしれない。各地の動物や人間の身体計測などもその例である。地域的変異が分かると新たな観点の導入が可能になる。ただし、これらの個々の研究は大事ではあっても、必ずしも第一級とは言えない。従事している研究者は、それだけ取り出せば新味

はないが、それら個別の発見を通じて何とか全体像を明らかにし、新しい理論を展開しようと精魂傾けてがんばっているのである。

"Something new" が発見とは限らない。新しい考え方によって、関連する現象をこれまでのどの仮説または理論よりもうまく説明できたら、それは新しい仮説となり、理論となる。新しい仮説や理論の提出もまた、重要な研究である。新しい理論とは、大げさに言えば新しい世界観、新しいものの見方を提示することでもある。科学の世界では、これをパラダイムの転換と呼んでいる。

ずぶの素人がまったくの偶然で発見したことも研究と言えるのか、などと茶々が入りそうだが、発見した現象の価値を判断でき、それを適切な形で発表したのなら、つまり人々に伝達することができたのなら、あるいは、不特定多数の人々に発見の内容を正確に伝えるだけの力があったのなら、たとえ素人による偶然の発見であったとしても、それは研究の成果と言えるだろう。しかし、何の準備も予備知識もなしに新しい発見が転がっているほど世界は甘くはない。私が太陽に異変を見つけても、地殻変動に出会っても、はたまた新しい植物を見つけても、多分その意味に気づかずに過ぎてしまうだろう。「見ても見えず」と言うのが大多数の場合だ。

日本に旧石器時代の遺跡を最初に発見した相沢忠洋さんは素人ということだったが、独学ではあるがそれなりの予備知識を持って、信念を持って、大変な努力を積み重ねた上の発見だったことはよく知られた話である。

では、多くの人の研究成果を集めて整理し、それを解説・紹介するのは研究だろうか。難しいところだが、単なる紹介や解説は研究ではないとされている。しかし、これまで誰もしなかったような明解適切なまとめや総括だったり、新しい観点が提示されていたり、それによって諸現象をまとめてよく理解できるような解説だった場合には、「総説」と称して研究の一部と認められている。これらは国際学術誌でも採択されている。いずれにしても、従来よりいっそう理解を深めることが可能な「新しさ」が必須の条件である。言い換えれば、新鮮であること、インパクトがあること、人をして「ん、これは！」と思わせることが必要なのである。人の持っている常識を覆し、目からうろこを落とさせることである。もちろん、その成果が時代の常識のずっと先を行っていればいるほど、注目されるまでに時間がかかるかもしれない。

研究とは、人類の知識を増やし、広げ、深め、豊かにし、思考の世界を広げる作業である。その点に寄与しない作業は研究と言わない。しばしば新しいだけの、奇をてらう新説もないではない。一時はキャッチフレーズの巧みさによってもてはやされることがあったとしても、擬似理論は早晩消え去る運命にあることを承知されたい。自然科学では、新説にもそれなりの、人が納得するだけの証拠の提示が求められている。これなしには擬似理論の提示も不可能なのである。

主として自然科学の観点から述べてきたが、応用科学、あるいは技術の分野でも基本は同じ

だろう。開発や発明などでも同じことが言える。ほかの誰よりも先を行ったことが重要なのである。その成果が他人とは一味違うアイディアに基づくものであったり、膨大な試行錯誤の結果であったり、徹底的な技術開発であったり、特徴はさまざまだろう。ただし、科学技術の分野は過度の競争に曝されているため、他人のアイディアを借用してほんの少しだけ先を行く不埒者が後を絶たないらしい。そんな偽の new とは違い、真の優れた研究のいずれにも共通しているのは、他人とは違う何か、真の独創性があったと言う点だ。

もちろん、新しさやインパクトを狙うあまり、データや発見内容を捏造するなどは論外である。

3　人文科学における研究

さて、人文科学ではどうだろう。自然科学のようにすっきりとはいかないような気がする。詩歌や小説、戯曲、最近では映画製作などの創作活動が研究の一部であることは誰しもが認めるところだろう。しかし、古来、多くの逸材が精魂込めて取り組んできた「人間とは何か」、「人生はどうあるべきか」、「不可思議きわまる男女の機微」、そして「世界をどう見るか」、などの問題に、さらに新しい視点を導入することは至難の技にちがいない。ひっきょう、二番煎じ、三番煎じが多くなる。ただの趣味活動にとどまらない研究として仕上げてゆくのは容易なことではないように思われる。それでも、「これは今までになかった斬新な切り口だ」と人に思わせる作品がときに見受けられるのは、やはり、優れた人材は自分自身の考えをその作品の中に生かそうと日夜奮闘しているからだろう。そして、それは現代あるいは今日という問題に合わせた対応がなされているからだろう。それが独創性につながるのである。のほほんと他人の後を追っているだけで新しい研究にならないことは確かだ。

俵万智さんがすごいのは、短歌または和歌という３１文字に凝縮した芸術とも文学とも言える日本の伝統的な美の世界を、現代人の心の中によみがえらせたことだろう。サラダ記念日にしたって、神奈川県立川崎高校（だったかな？）にしたって、作者の気持ちが見事に凝縮されている。彼女のおかげで、世界に類を見ない、しかし衰退の一歩をたどっていた短歌の世界を改めて見直した人、そして自分の人生に潤いをもたらした人は何万人もいたことだろう。

評論または批評と言う分野がある。他人の作品を評することを業とするのを評論家または批評家と言う。他人のふんどしで相撲をとるようなもので、私はあまり高く評価してこなかった。しかし、優れた評論家と言われる人もいるそうだし、評論または批評によって原作者や同じ道を志す人たちによい刺激を与えることができたら、それも研究として位置付けられるのかもしれない。

教育の方法開発というのも研究として成立するだろう。最近、研究よりも教育に重点を移して試行錯誤している私にも、ぜひ、その成果を利用させて欲しいものだ。人をして「これは使

える」と思わせるような開発こそ、研究といえるだろう。しかし残念ながら、私がぜひ使わせてほしいと思うような新しい考え方や方法は、あまり見ても聞いてもいない。見た目に新しいだけで、たいていがコンピュータ時代に便乗しただけの方法開発に過ぎないからだろう。教育とは何をすることかという根本から考え直した方法ではなく、小手先の方法開発だからだ。

それよりも今、アジアの英語を見直そうという機運が出てきているのは嬉しいことだ。10年以上も前、たまたまアフリカ奥地の調査地で雑音混じりに聞いていたBBC国際放送が、「英語を真の国際語にするためにはキングズ・イングリッシュにこだわっていてはいけない。西アフリカのクレオールも、アジアのピジン・イングリッシュも、インドの(いわゆるチッチ・)イングリッシュもすべて英語として扱わなければならないだろう」ということで、シリーズ番組を組んでいた。まったくその通りだと思うが、そうした声がイギリス本国から発生し、日本では今頃になってアジア英語の研究などと言う声があがり始めているのは遅きに失したと言うべきだろう。日本の英語学者が世界英語の研究をおろそかにして、ただただ英米英語に追随してきたからだろうと思う。

遅きに失しても、それでも研究を盛んにし、教育の中に取り入れてゆくべきだろう。これまでの英語研究と英語教育が世界も日本も見ていなかったのだと思う。イギリス本国とアメリカしか見ていなかったのだ。インド人のように堂々と自己流の英語で世界をまたにかけるべきだ。その度胸のない英語学者は消えて失せるが良い。

大学教員がしばしばその地位を利用して行う研究は、学生を被験者に仕立てて調査をすることだ。相当数のサンプルが得られるのは明らかに利点だ。ただ、注意しなければならないのは、事前に、もしかしたらやむを得ず事後になるかもしれないが、その研究の意義や結果の持つ意味などについて学生に十分説明することである。これによって学生たちは、自分を巻き込んだ研究の意義と位置付けを知って、学問への理解を深めるに相違ない。ただし、受けている教育と何の関係もなければ、あるいは意義の不明瞭な研究だったら、実験台に使われたという記憶だけが残って、かえってマイナスの結果をもたらすだろう。

学生たちを研究補助者、あるいは共同研究者に使う場合も同様である。経験の浅い補助者にもできる仕事なら、大いに役立つだろう。全くの部外者に高い謝金を払って連れてくるよりも、はるかに有効だと思われる。もちろんこの場合は被験者以上に十分な説明と学生たちの当該研究における位置付けをしっかり理解させる必要がある。時には学生たちが代を重ねて、自分たち自身の研究に発展させることもあり得る。学生に第一級の研究成果をあげさせることは容易ではないが、しかし、教師側の力量によることだ。もしかすると、何人かの学生の生涯に大きな影響をもたらすようになるかもしれない。

まだまだいろんな研究があるだろう。ただ、どんな研究でも、人に新たな目を開かせるものでなくてはならないことだ。どんな小さな研究でも、人の目からうろこを落とさせることは必須

だ。

4　独創性とは何か

とは言うものの、他人にはない独創性をどうしたら発揮できるのか。アインシュタインや湯川秀樹博士のような超天才はともかく、そこら中に秀才がうようよしている何百もの大学の中で、いや、世界中で何万もの大学の中で、われわれ普通の大学の普通の教員に独創性など発揮する余地はあるのだろうか。

授業のある日にしか出勤せず、自宅でシコシコ考えているだけで凡人に独創性など生まれるはずはない。しかし、凡人にも独創性を発揮できるチャンスはある。その第一。よその分野のアイディアや方法を盗んでくることである。盗むと言えば聞こえが悪いが、応用することだ。ある分野では当たり前の考え方や方法が、別の分野では全く斬新なことがしばしばある。この盗みをするためにはアンテナを長く伸ばし、盗みの機会を探し回ることが大事だ。異なる分野の学会や研究会にも出席して、「あっ、これを自分の研究に当てはめたらおもしろいかもしれない」という材料は転がっているはずだ。あとは機会をものにするだけの準備運動ができているかどうかだ。

その第二。第一が機転、機敏、応用、等の才覚を発揮したのに対し、こっちは鈍重人間に合ったやり方である。すなわち、あくまでも初心を貫徹することだ。もちろん、第一だって初心貫徹ではある。ただ、アプローチの方法を始終試行錯誤している。それに対してこっちは、方法さえも変えずにしつこく追求する。機敏に変身する秀才には見通せなかったデータが出てくるかもしれない。しかしこっちだって、「チャンスだっ！」に気がつかなければ素通りしてしまってお終いだ。

要は、広い視野を持って探し求めることにつきる。探し求める気概を失ったときが、研究人生の終焉である。

ここで、私の元同僚だった正高信男さんの研究を紹介したい。誰でも自分に子どもができたとき、いろんな発見に胸をときめかすものだ。少なくとも研究・教育に従事する者なら、何月何日、視線が定まったとか、泣き声だけでなくぶつぶつ言いだしたとか（これを喃語という）、言葉になり始めたとか、這い這いし始めたとか、ノートに記録しておこうとまでは思ったはずだ。たいていはそこで終わってしまう。私もそうだった。正高さんは、これを第一級の研究にしてしまった。研究器材は簡単なテープレコーダー。あとは何人かのお母さんたちに協力を求め、指示通りにしてもらっただけ。ある発達段階で、どうして急におしゃべりになるのだろうか。赤ちゃんはお母さんの何に反応しているのか。誰でもが感じた疑問に回答を求める姿勢が、ずぼらな私との差を作ったのだった。『0歳児がことばを獲得するとき』は研究を志す者の必読に値する。これは心理学でもあり、生物学でもあり、行動学でもあり、人類学でもある。ア

プローチの仕方は自然科学だが、本当は育児学である。人文学部で行われても不思議のない研究であった。なぜだろう（Why）、一体なんだろう（what）という疑問に始まり、どうしてそうなっているのだろう（how）というメカニズムの探求に進むのが自然科学の方法なのである。

もう一つ。今日、霊長類学と呼ばれるようになったサルの研究が、日本に発祥したことは良く知られている。個体識別と長期継続調査という、社会学、文化人類学、または民族学における村落調査の方法を動物の研究に応用したものである。当初は、サルの顔を一匹一匹識別などできるはずがないと、欧米人はまったく信用していなかった。しかし、たまたま野生チンパンジーを個体識別したイギリス人の女性研究者がいたことから、一気に欧米にも広まった。今日では、動物の集団や社会の研究する際の必須の方法となっている（杉山、2000）。

5　研究費の獲得と現代における意義を考える

さて、研究をするためにはお金がかかる。近年は文部科学省や各省庁ばかりでなく、各種財団が研究資金を提供している。これらは競争的研究資金と呼ばれている。競争的研究資金は申請によって取捨選択される。申請書は、いかに審査委員が納得するように書くかが重要だ。

私が大学院生から助手だったころは、研究費は教授か一部の助教授にしか獲得できなかった。いくら優れた研究をしていても、教授（または助教授）の研究費を分けてもらう以外に方法がなかった。しかも堅固な講座制の確立していた時代であり、教授だって研究目的を限定して獲得した研究費である以上、教授と関係のない研究で研究費を分けてもらうことは、よほど鷹揚で裕福な教授でない限り不可能だった。もちろん、自然科学では論外だった。どんな分野でも、誰もが自分の名前で研究費を申請できる近年は、まさに今昔の感がある。まるで夢のようだ。とくに最近は「若手」専用の競争的研究資金も多く、また文部科学省はさまざまなメリットが特定大学に偏らないよう慎重に配慮している。弱小大学だから科研費が通らないなどとぐちをこぼすのは、つまらない研究であったか、申請書が魅力的に書かれていなかったかのいずれかであろう。

さて、今日の研究費申請に戻ろう。応用科学や技術は比較的簡単だ。必要性が容易に説明できるからだ。それに、研究費もふんだんにある。自然科学でも最近は直ちに私たちの生活に影響を及ぼす研究が増えている。しかし、自然科学の多くの分野や人文科学の大部分のように、明日の人々の生活を快適にするわけでも、物価を下げてくれるわけでもない研究は、ここが大事なところである。どんな純粋学問であろうと、現代という時代にどう必要なのかを説明する必要がある。私の甥にギリシャ哲学という古めかしい研究をしている若者がいるが、大学院の入試に「ギリシャ哲学の現代的意義を問う」という問題がでたとのことだ。適切な問いだと思う。現代的意義が分からないのなら、あるいは存在しないのならやめたがよかろう。

時代におもねるあまり節を曲げてはいけないが、だからといって時代に無関心であってはならないのだ。また、人の気を引くテクニックばかり上手になることが奨励されるわけでは決してないが、他人の関心を呼ぶ、訴える力のあるプレゼンテイション（発表または表明）の工夫を軽視してはならないだろう。

6　論文、報告書、そして研究費申請書

論文は研究の結果を論理的、かつ簡潔に書かねばならないことはもちろんだ。しかし同時に、この研究と成果がいかに重要であるか、現時点における意義が明瞭に、あるいはそれとなく書かれていることが重要である。それと、何が新しいのか、何がこれまでの類似の研究になかった独自の結果なのか、それが読み手に伝わらないような論文は論文と言えないだろう。

報告書の場合はもう少し単純だ。例えば、縄文遺跡発掘の報告書は、結果がきちんと書かれ、何十年たっても使える詳細なデータとして提供されていれば、当面は良いだろう。しかし、もちろん、類似の他の遺跡との関係や、この遺跡の特徴、全体の中でどのような位置を占めているかなどの検討がなされていない報告はデータに過ぎない。データは、他人が使ってくれるのを待っているだけの消極的な研究でしかない。

自然科学の論文には決まった形式がある。何十万編という論文が書かれる過程で経験的に確立してきた形式であり、大変合理的であると同時に、読み手にとって便利でもある。人文科学がそのまま踏襲しなければならないわけではないが、大いに参考になるだろう。すなわち、①タイトルと著者名、②導入部、③材料（対象）と方法、④結果、⑤論議、⑥結論、⑦要約、⑧謝辞、⑨引用文献のリスト、という全体の構成である。最近は誰もが忙しくなってきたので、要約を最初にもってくることが多い。そこだけ読めばおおよそのことが分かるようになっているのだ。導入部では、この研究の周辺の現状が紹介され、何がまだ解決されていない問題か、そして著者は未解決の問題のどこにどう挑戦したのかがわかるように語られる。③と④は説明するまでもなかろう。狭義の「本研究」そのものである。そして⑤で、この研究によって明らかにしたことが、もっと大きな観点に立つとどんな意味を持つのかが明らかにされる。つまり、研究の具体的な結果だけでなく、広くその分野における位置付けまで明らかにすることが要求されるのである。独創性に基づく結果としての something new がなければ、「A氏の研究結果を支持する」という、いわゆる追認論文にしかならない。報告は②と⑤を必ずしも要求しない。それだけ単純なのである。また、先行研究を無視した論文は採択されない。その意味で、『理科系の作文技術』は人文系の研究者にも大いに参考になるだろう。一読をお勧めしたい。一言で言えば、起承転結を明確にすることである。

（したがって、その意味で本稿は研究論文とは言えない）

他人の論文を読んだ後で、「はて、この著者の独自の結果や他人と違う見解や新しい位置付け

はどこにあるのだろうか」と、首を傾げたくなるようなことがしばしばある。このような論文は通常の学術雑誌では却下 (reject) されるが、審査のない雑誌、あるいは、第一級の研究者を審査員にしていない三流雑誌ではパスしてしまうことがある。この忙しい時代にそんな論文を読まされるのはたまらないので、そんな雑誌は誰も見なくなる。積んでおく場所もないので、ダイレクトメールと同じように受け取りたがらない傾向が強まっている。大学の研究紀要は、今、そんな崖っぷちに立たされているのである。原稿をフロッピー・ディスクで集めれば編集も印刷も容易、かつ安価にできる時代だけに、この危機は深刻である。

「いつか誰かが読んでくれるかも知れないから書き残して置きたい」、と言った者がいた。それはそれで良い。しかし、そんなあいまいなのは趣味に属することであり、自費出版の対象だ。教員研究費の一部として、あるいは競争的資金を得て遂行する研究は、もっと明確な意義を見つけなくてはいけない。こんな大事なことだから、少しでも速く、より多くの人に読んでもらいたい。そして、今こそこの研究をさらに先に進めたい。その成果を書き残さねばならない。そんな大事なことなのだからこの研究はしなければならないのだ。そういう説明ができないのなら競争的研究資金の獲得は所詮あきらめたほうが良い。

その一方、「書店の店頭で売れるような研究紀要を作りたい」と言った者がいた。審査員に理解してもらえるような申請書を書くことは重要だが、店頭で売って赤字にならない学術誌を作るような考えは、少なくとも当分の間、起こさないほうが良い。伝統のある学術誌の中には、店頭で売って採算の取れる雑誌もないではないだろう。しかし、後発者が、しかも今日のように難しい書物を読まなくなった人々を相手に売るためには、その学問姿勢を崩さない限り売れるはずがない。

私はこれまでに 7 冊の単著書、3 冊の編著書、3 冊の訳書を出版してきた。精魂込めて書いた『子殺しの行動学』を北斗出版という無名の小さな出版社から出して、その販売がやっと千部に達したとき、同じころに出されたある先輩の著書が 2 万部に達していた。「どうして私の本は売れないのだろう」とぐちをこぼす私に、あるマスコミ関係の友人が言った。「すばらしい本だとは思うけど、杉山さんは売ろうと思って書いていないでしょう」。実はその通りだった。読み手に分かりやすく書くことには力を入れてきたが、売るために媚を売ったことはない。著名人でもない限り、売れるように書かなければたくさん売れるはずがない。売れるように出版社が広告を出したり、内容や表現に細工をしなければ売れるはずがない。

無名の著者がその研究成果を発表するのは、一生懸命、自分の研究成果を論理立てて、簡潔に、自分の考えすなわちその独創性を明確に提示し、その重要性を強調し、分かりやすく書くこと以外にありえない。すなわち、当初から書店の店頭で売れるような学術雑誌を作ろうなどというのは、少なくとも人文科学者の考えることではない。「売れるような学術誌を」というのは決して理想にはならない。それは堕落以外の何物でもないと、まずは思うべきだろう。逆

に言えば、万一売れるようになったとき、自分の姿勢の崩れを自覚すべきだろう。私は自分の研究成果を一般の人々に理解してもらうために自著を出版してきているのであって、論文として書いたことは一度もないが、それでも出版社が赤字を出さないところまで売れたときには、兜の緒を締め直すことにしている。研究とはそんなものだと思う。地味な研究ほど、今なぜこの研究は大切なのかをしっかり考える一方で、媚びを売らない毅然とした姿勢を維持する必要があるだろう。

本学の教員一人一人が自分自身の考えで、たとえ小さくともそれぞれの研究分野を開拓し、その考えや成果を的確に発表し、そしてその心と姿勢を学生にも伝えてゆくならば、互いに連携した研究と教育の行われている教員と学生がいる、本物の大学として長く評価を受ける存在となるだろう。東海学園大学を、そんな大学にしたい。

引用文献

木下是雄　1981.『理科系の作文技術』中央公論社（中公新書）
正高信男　1993.『０歳児がことばを獲得するとき』中央公論社（中公新書）
杉山幸丸　1980.『子殺しの行動学』北斗出版（1993. 講談社学術文庫で再刊）
杉山幸丸　2000. 日本のサル学を振り返って、これからの道を探る. 杉山幸丸編『霊長類生態学』京都大学学術出版会、pp.451-472.

◇　◇

経営学部のみだった東海学園大学は、本年次より人文学部の開設をみました。「紀要」も次号に向かっては二学部体制となって充実するはずです。今号では人文学部長の杉山幸丸教授より新しい学部と「紀要」への思いを、経営学部長の山崎廣明教授からは歓迎の意を記念論文にこめて投稿いただき、新機軸を記念する企画としました。　（紀要委員会）